

# 壹

2021·2

# 風萱集

亀田虎童子

触れあへる昨日と今日の榎櫃の実  
探梅や美酒のごとくに水を飲む  
継るものあれば継りて蔦枯るる  
さつま芋好きか嫌ひか問はれても  
よろこびもかなしみもまた年を越す

小島 良子

十二月八日の日記短くて  
魚より魚影の迅し十二月  
てのひらに皺のたてこむ寒の人  
よるめきて掴む冷たき何や彼や  
大寒や一斉に点く街路灯

出牛 進

冬銀河ハヤブサ2の玉手箱  
徒長枝の目立つてきたる冬紅葉  
決断は明るき日差し煤払  
受くは良し出づるは難し賀状かな  
年の暮十大ニュースよみがへる

松下 道臣

敬老日八十歳はまだひよこ  
微かなる風が音生む竹の春  
電球の切れたるだけの厄日かな  
糸瓜忌の九回裏のツードウン  
よろけたり其の分うごく鱗雲



# 萱集

進選

蕎麦搔きに小半酒や通気どり  
千葉 中山 惠子

「肩掛けの麗子」画集の間に笑む  
冬座敷琴錦繡に包まれて  
石路の花竹の小径の灯となりて  
枯園や女庭師の声高し

冬霧や車列は光のみがゆく  
東京 谷田貝順子

トーストにたつぷりジャムを漱石忌  
冬の蝶眠りをるかに翅をとじ  
木の葉舞ふラリーの音のとほくより  
冬夕焼け「火宅の人」の書齋かな

一面の落葉の路地となりてをり  
東京 柳田 秀子

山茶花の咲き初む枝や実のはじけ  
鉢植の六個ほどなる枇杷の花  
小春日や友の回復近づきぬ  
尖りたるマスクいろいろ人の波

東京 加倉井たけ子

薄日射す竹の小径や石路の花  
千両も万両もあり殿ヶ谷戸  
馬頭観音松の菰巻き梅結び  
菰巻きは庭師気合いの梅結び  
雪吊りや女庭師の豆絞り

千葉 光成 敏子

門前は畑中の道小菊咲く  
木の橋は乾いてをりぬ小春かな  
屈伸の尺蠖沼の橋進む  
椎の実を拾へば根つこ付いてくる  
煙立ち竹爆ずる音秋の暮

埼玉 後藤美智子

小春日や書架への路をゆずられる  
北風に変はりし一日ペダル踏む  
年輪の輪の明かさや初時雨  
鉄塔を仰ぎて歩む冬はじめ  
春立つや去年の種だね踊り出で

東京 武田 未有

まだ紅を足しつつ立てり冬紅葉  
つれづれや肩まで入る置炬燵  
霜の墓誌なぞりて十二月八日  
風音や鼻先赤く冬至粥  
自販機の七色終電の聖夜

## 自習室 現代の俳句を読む

小島良子

木肌はなやぐ十一月のさるすべり 青柳志解樹

「俳句界」十一月号

自然即自然（じねん）を理念として、青柳志解樹氏によって創刊された「山暦」は、四十年を越える歴史を重ねて、終刊となった。氏はご郷里の長野県佐久へ居を移され、懐かしい佐久の地で新たな景に出会われている。

中国から渡って来たさるすべりは、花期も長く、赤や白の繊細な花が美しい。幹は淡褐色の薄皮に覆われ、それが斑に剥げ落ちたあとの白い肌に趣がある。寒さの兆し来る十一月の空気の中で、その枝振りや幹の美しさが目立つ。

木肌はなやぐは、植物ご専門の氏の視線で、百日紅への親しみの言葉。間もなく佐久は清冽な寒気に包まれる。

月光のしみわたりたる雑木山 志解樹

普通の言葉で平明な表現ながら、この雑木山は何と印象的なのであろうか。植林された山ではなく、ごく自然に色色な木がそれぞれ月光に包まれている。読む者の心の中まで月光がしみ入ってくるようである。

小春日や四方を山に囲まれて 志解樹

この度の特別作品には穏やかな声調が満ちている。千曲川の響きや、どこからか草笛の音も聞こえてきそうである。

海中に島育ちつつ夏の月

中村 和弘

「俳句」十一月号

島とは、海や川や湖などの水に囲まれた陸と思っ  
ていた。しかし、海中にも島となるべき地殻があつ  
て、永い時をかけて造山運動や隆起、沈降によつて  
新しい島へ育ちつつあると思えばうれしい。日本とい  
う花綏列島もそのような働きによつて生まれたらし  
い。

今、海は夏の月に照らされ、海中も月夜。月光は  
何処まで届くのだろうか。海は豊かに多くの命を活  
かしている。

海中に島が育つと詠まれたことによつて、永遠と  
いうものを形にして感じとることが出来たように思  
う。

荒壁に影を飛ばして曼珠沙華 和弘

影を飛ばしてに、曼珠沙華の迫力を受け取る。影  
を飛ばすのはこの花自身だろうか。

荒壁は粗塗りをしただけの壁で、昔は農家や民家  
の外壁にも見られた。ざらりとした壁面にどこか妖  
しい美しさを抱える曼珠沙華の複雑な影が貼りつい  
ている。影はやがて消えるであろうが、この凶柄に  
は心惹かれる物語がある。

金亀虫火中にパチと爆ぜしのみ

和弘

焚火の中にでも飛び込んだか投げ込まれたか。小  
さくとも一つの命である。パチの二字が切ない。